

## 「～こむ」の複数意味について

## 1. はじめに

単独用法にはない複合動詞特有の意味を分析することが、複合動詞の全体像を考えていく上で重要であると先行研究にも指摘されてきた。

今回の分析はそのような考えに基づき、後項「～こむ」の意味の全体像を掴むことに主眼を置く。そして、前項動詞と結びつくことで初めて生まれる複合動詞後項「～こむ」特有の意味が、どのようなものかということ考察していく。

今回の分析対象として、インターネットのwwwページを利用して『日本語基本動詞用法辞典』にある883語について検索した結果の「こむ」を後項に持つ複合動詞305語を採集した。

(注：今の段階で305語についての分析が全部終わってない。)

## 2. 各辞書による「こむ」についての解釈

複合動詞「～こむ」の意味を考える上で、単独動詞「こむ」の意味を理解していなければ、どの意味が単独動詞そのままの意味で、どの意味が複合動詞特有の意味なのか判別できない。なので、単独動詞「こむ」の意味を確認しておく必要があると思われる。

本発表は主に、広辞苑、大辞林、日本語基本動詞用法辞典の意味記述を参考し、考察を加えた上で、意味を確認した。

- ① 乗り物・建物・道路などに人や物がいっぱいである。  
例：バスは乗客で込んでいた。
- ② 物事が複雑に入り組む。  
例：手の込んだ仕事。

## 3. 複合動詞「～こむ」の分類と考察

複合動詞「～こむ」をそれぞれの語の持つ意味ごとに自分なりの考察をした。

## 3. 1 動詞+動詞の意味

つまり、前項動詞も後項動詞も単独動詞の意味がそのまま残っている。  
検索によって、ほとんど見つけられない。

## 3. 2 前項動詞と結びつくことによって単独用法にはない、複合動詞特有の意味となっている。

(1) 内部へ、中への移動を表す。(移動先：具体的な場所)

①後項「こむ」の意味は弱くなる。

例：植え込む、埋め込む、しまいこむ、詰め込む

これらの動詞は、前項動詞がすでに、「内部への移動」という意味を含意しているので、「こむ」と結びつくことによって、ただ前項動詞が表す状態あるいは程度が深くなるということを表す。これらの複合動詞全体の意味は主に前項動詞に関係があるので、「こむ」の意味は弱くなる。

②後項「こむ」の意味は強くなる。

②-1 例：飛び込む、呼び込む、投げ込む、踏み込む

これらの動詞、前項動詞はもともと「内部への移動」という意味を含意していな

いので、「こむ」と結びつくことによって、「内部への移動」という意味が新たに生じる。これらの複合動詞全体の意味は主に後項動詞「こむ」に関係があるので、「こむ」が焦点化され、意味は強くなる。

②-2 例：入り込む、泊り込む、住み込む

これらの動詞、前項動詞は「内部への移動」という意味を含意するが、前項動詞は意識がつよい動詞であるため、ただの内部移動を表すだけでなく、「その場にとどまる」という結果を注目しているので、「こむ」が焦点され、意味は強くなる。

(2) 主体の変化を表す。(移動先：抽象的な場所)

このグループの動詞の意味は、(1)からの拡張用法である。

検索した結果として、前項動詞が示す状態、行為が継続することによって、「こむ」の意味も変わってくる。

① 主体の生理変化

例：老い込む、冷え込む、老け込む、咳き込む、眠り込む

前項動詞が自然あるいは生理的な変化を表す動詞である。「こむ」と結合することによって、主体が意図を持たずに前項動詞（つまり、移動先）が示す状態への移動、変化を表す。

ここの「こむ」は変化の程度が進むことを表し、段階性がある。だんだん「～切った」という状態になる。

② 主体の思考活動

例：困りこむ、黙り込む、思い込む、考え込む、気負いこむ

前項動詞が人間の思考活動あるいは心理変化を表す動詞である。「こむ」と結合することによって、主体が無意識のうちに前項動詞の状態になる。「前項動詞への固着」という結果が焦点される。

③ 主体の意志的变化

例：歌いこむ、使い込む、走りこむ、読み込む、座り込む

前項動詞が人間の意志的行為を表す動詞である。「こむ」と結合することによって、反復的にまたは長い時間に前項動詞が表す動作を行うことによって、いい結果になるという意味を表す。ここで、前項動詞が表す動作の反復性と時間性は焦点される。

(3) 比喩的に使われる。

これらの動詞は動作に重点ではなく、主体の感情、主体の置かれた状況が焦点される。

例：怒鳴り込む、暴れ込む、殴りこむ

怒鳴り込む：相手のいる場所に行って激しい口調で非難する

例：テレビの音がうるさいといって隣人に怒鳴り込まれた。

暴れ込む：他者のテリトリーへの乱暴な侵入。

例：男が言いがかりをつけて暴れこんできた。

殴り込む：相手の身近に踏み込んで殴る。他人の家などに押しかけ乱入す

る。

例：抗争相手のやくざが集団で殴りこんできた。

これらの動詞は「こむ」自体の意味ではなくて、比喩的用法として使われている。この時、実際の内部移動の意味ではなく、「侵入、乱入」という感情表現の方に重点があると思われる。

#### (4) 特有の意味を持つ複合動詞

これらの動詞の意味は前項動詞、後項動詞には重点があるのではなくて、結合することによって、全体的に特有の意味として新たに生まれる。

例：申しこむ、見込む、着込む

申し込む：こちらの希望、意思などを相手方に伝えること、あるいは相手に進んで申し出ることを表す。

例：講義を申し込む。

購読を申し込む。

見込む：あらかじめ考慮に入れる。

例：多少の損を見込む。

着込む：着物をたくさん着る。

例：着込んで来たので寒くない。

#### 4. 今後の課題

① 文脈によって、意味が違ってくる場合もある。

例えば：内に発煙筒を投げ込む。

一日に200球投げ込む。

同じ「投げ込む」であるが、それぞれの意味を表す。こうした派生関係についての考察が必要である。

② 派生関係（具体的意味から抽象的意味への転義など）を検討しながら意味的派生プロセスの記述を試みたい。

井戸に落ち込む→貧窮のどん底に落ち込む。→最近、気分が落ち込んでいる。

③ 単純動詞「V1」と「V1+込む」にはっきり差異があることやその差異が文脈をどう捉えるかを考察したい。

例：「泊まる」と「泊り込む」 「住む」と「住み込む」

参考文献：

姫野 昌子 (2003) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房

松田 文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究』 ひつじ書房

1989 『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店

1995 『大辞林 第二版』 三省堂

2004 『広辞苑』